



Title	大きな絵本のプロジェクト : 知的障がい児のための教材開発の試み
Author(s)	島先, 京一
Citation	デザイン理論. 2011, 56, p. 112-113
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53488">https://doi.org/10.18910/53488</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 大きな絵本のプロジェクト

### —— 知的障がい児のための教材開発の試み ——

島先京一／成安造形大学

世界にはその生涯を通じて言語や言語による外部世界の認識能力を獲得することのない、愛すべき多くの子どもたちが存在する。日本においても、そのような重度の知的な障がいとともに暮らす子どもたちが2万3千人以上いる。即ち、市民5千人当たり一人、言葉を全く獲得しない子供が暮らしていることになるが、この数字は、このような子どもたちが単なる少数者として社会の中で周辺化されてはならないということを意味する。

一般的な市民の大半にとって日常生活の中で、重度の知的な障がいとともに暮らしている子どもたちの存在を認識することは、どちらかといえば稀なことであろう。多くの市民は、そのような子どもたちに対する社会的なケアを専門家の担うべき特殊な責務と考えていると思われるが、このことが一般市民の重

度の知的障がい児の存在に対する認識の低さの理由の一つと考えられる。しかし、障がい者や障がい児がコミュニティの中で十分な生を送るためには、一般市民の障がい児・者に対する恒常的な関心を喚起する必要がある。

発表者はこのような関心に基づいて、美術やデザインを学ぶ学生を障がい者福祉の現場に参画させる企てに取り組んできた。今回の発表は、そのような取り組みの成果の一つであり、成安造形大学の学生とともに、特別支援学校・小学部の重度の知的障がい児のクラスのための教材開発を行った。

学生たちと発表者は、定期的に特別支援学校の当該のクラスを訪問し、クライアントとしての子どもたちの調査を行った。言葉を獲得していない子どもたちとの交流は、他のことから決して得られない喜びをもたらして



くれたが、同時に私たちは、子どもたちがどのように他者や世界を認識しているのかを観察した。8か月の調査の後に私たちは、KJ法を用いて子どもたちの世界認識の特性の把握を試みた。その結果、先生方や友だちをはじめとする他者の表情を中心とする視覚情報が、子どもたちの世界認識において重要な働きを示すことが分かった。

私たちはこの調査結果を元に、教室の子どもたちがキャラクターとして登場する、身体的なスケールをもった屏風型の絵本の制作というデザイン・ソリューションを導き出した。両面に場面設定が描かれたB1パネル2枚1対の3連結、合計6面からなる屏風型絵本は、全面がマジックテープに反応する布で覆われており、マジックテープで裏打ちされた子どもたちのキャラクターは画面のどの部分へも移動させることができる。また、想像上の生き物を4体想定し、キャラクターパネルとぬいぐるみも制作した。教室において、先生方が子どもたちや想像上の生き物のキャラクターを自由に画面上を移動させながら、即興的にお話を語るという使い方が想定されている。6面の場面設定は、子どもたちの日常生活の様々な場面である。

私たちは、調査に協力してくださった特別支援学校に、「大きな絵本」を贈呈した。私たちのささやかなプレゼントが、子どもたちの情緒発展のお手伝いの一助になれば、これ以上の喜びはない。

制 作：成安造形大学・人間学講座・島先京  
一研究室・プロジェクト演習B2，  
B4

総指揮：島先京一

下 絵：竹村祥平

技 術：中根幸子

協 力：滋賀県立北大津擁護学校